

## 2023 年度学位記授与式 学長挨拶

本日、こうして皆さんに博士、修士、学士のそれぞれの学位記を授与できることを嬉しく思います。学位記とは、専門的な知識、技術、態度を修得したことを、日本福祉大学として証するというものです。それは所定の科目を履修したというだけではなく、各学部のディプロマ・ポリシーに照らして、しっかりと専門性を身に付けたということを本学が証明するものです。本日、みなさんが手にする学位記には、これまでの大学生活の全てが刻まれているのです。そのことを、どうか誇りに思ってください。

そして、この学びの過程でお世話になった方たちの顔を思い浮かべてください。ご家族や友達、実習先やアルバイト先のみなさん、大学の職員や教員。この4年間の出会いは、将来の糧になるはずです。そうした多くの人たちに支えられて、今日のこの日を迎えられたのです。この式典が終わったあと、少し照れ臭いかもしれませんが、きちんと感謝の言葉を伝えてください。

さて本学は学園創立70周年を迎えました。1953年、日本福祉大学を建学された鈴木修学先生は、大学の根本精神として、次のように語っています。

「この悩める時代の苦難に身をもって当たり、大慈悲心・大友愛心を身に負うて、社会の革新と進歩のために挺身する志の人を、この大学を中心として輩出させたいのであります。」

第二次世界大戦が終わった直後、世の中が混乱していた時代のなかで、未来をつくる志の人を輩出したいと願ったのです。それから70年経ち、現代社会は幸せになったといえるでしょうか。今も、この瞬間、世界では戦争が続いています。日本社会でも格差や分断がすすみ、社会的孤立が大きな社会課題になっています。将来に希望が見いだせない若者も増えているという調査結果もあります。

悩める時代の苦難は、いつの時代にもあるのかもしれませんが。だからこそ、他者と共に生きることの大切さを学んだみなさんは、これからの社会の希望なのです。みなさんが学んだ「ふくし」は、社会に出たら「所詮、きれいごとだ」「机上の空論だ」と言われるかもしれませんが。でも私たちの未来は「ふくし」無しにはあり得ないのです。その志を持ち続けてください。一人ひとりがその志を持って生きていくことが、これからの社会を変えていくのです。

「ふくし」、「ふつうのくらしのしあわせ」は、私たちの平凡なあたりまえの日常の暮らしのなかにあります。そしてそのことが享受できない人たちが、すぐ近くにいるのです。あるいはコロナ禍では、ウイルスによって私たちの生活がいとも簡単に変えられてしまいました。

人との接触を避け、お互いに距離を保つように言われたことで、私たちは悩みました。人とのふれあいや関わり、協働性を大切にする「ふくし」が崩れてしまうからです。

そのことを身を持って体験してきたのは、みなさん自身です。2020年春、みなさん

の入学式、全体式典は中止せざるを得ませんでした。入学後もオンラインでの授業が続き、楽しみにしていた大学生活も、理想とはかけ離れてしまったかもしれません。また通信で学んだみなさん、大学院で研究をされたみなさんも、制限された生活のなかで学修計画、研究計画の変更が余儀なくされ、大変難しい環境での学びとなったと思われます。でもそのなかで悩みながら学んできたこと、考えてきたことはこれからの礎になるはずです。

このことは、1月に起こった能登半島地震でも同様です。「ふつうのくらしのしあわせ」は、一瞬にして崩れるのです。でも同時に私たち人間には、それを回復していく力があります。一人の力では及ばなくても、他者と支え合うことで、レジリエンスが高まっていくと言われます。だからこそ、共に生きる知恵を身につけていくことが、求められるのです。

ではどうしたら、誰もがしあわせに生きていくことができるのか。それには正解があるわけではありません。マニュアルがあるわけでもありません。正解のない問いを、自分で探していくのです。どんな答えを見つけていくのか、みなさんの人生のなかで問い続けてください。それが日本福祉大学で学んだ志です。

これを卒業にあたって、はなむけの言葉といたします。

最後になりますが、本日のこの日を無事に迎えられたこと、ご家族、保護者の皆様、そして来賓の皆様はじめ関係者の皆様方に、大学を代表して心から感謝申し上げます。

あらためまして、ご卒業、おめでとうございます。

2024年3月16日

日本福祉大学 学長 原田正樹